

## 【活動報告】

東京都立中央図書館・東京都公文書館共催 東京文化財ウィーク 2015 参加企画展

# 江戸城から明治宮殿へ —首都東京の幕開け—

東京都公文書館 史料編さん係  
篠崎 佑太

### 1 展示開催の経緯

東京都は毎年「東京文化財ウィーク」として、都民に文化財を身近に感じてもらうため、都内にある文化財を一斉に公開する特別公開事業と、文化財めぐりや講座などを行う企画事業を実施している。平成27年度、東京都公文書館は企画事業として東京都立中央図書館との共催展示「江戸城から明治宮殿へ—首都東京の幕開け—」（以下、当展示）を平成27年10月31日（土）～11月15日（日）の期間で開催した。

江戸城や皇居は、現在まで江戸・東京を代表する馴染みの深い建築物であるが、その江戸から明治にいたる変遷や、現在の皇居に続く過程については知られていないことも多い。当展示では、東京都立中央図書館の所蔵する重要文化財「江戸城造営関係資料（甲良家伝来）」と明治宮殿の造営にかかわった木子家に由来する「木子文庫」、東京都公文書館の所蔵する重要文化財「東京府・東京市行政文書」を中心に、江戸城から明治宮殿への変遷を通じて江戸から東京への歩みを紹介した。そのねらいは、これまで詳しく知られていない「皇城」と「明治宮殿（宮城）」の実態や、明治初年の東京の様子を都民に知ってもらう点などにある。

本稿では、当展示で使用した史料を示し、展示構成などその概要を紹介する。また来館者へ実施したアンケートの結果をまとめ、成果と課題を総括していきたい。

### 2 展示構成と出展史料

ここでは展示構成の順に出展した史料を紹介しながら、当展示全体の概要を示していく。なお出展史料の一覧は、関連年表と共に本稿末に掲載してあるので、あわせて参照していただきたい。また本文中の展示番号は、文末の展示史料一覧に対応するものであり、各史料の詳しい情報については、図録（都立中央図書館HPにてPDFデータを公開）を参照されたい。



## I 江戸から東京へ

本章では、明治政府の基盤ともなる「東京」の成り立ちや、明治天皇の行幸にともない東京で実施された祝祭や儀礼に注目して、移行期の変化の概要を紹介している。

幕末の江戸城は、安政6(1859)年10月の火事で本丸が焼失し、文久3(1863)年6月の火事で西丸が焼失した。いずれの火事の際もすぐに再建のための普請が実施された。ところが文久3年の西丸再建普請中に本丸が焼失したことによって、元治元(1864)年、一部に本丸の機能も包含した西丸が再建された。これ以降、本丸が再建されることはなく、慶応4(=明治元、1868)年正月の段階では、西丸御殿が残るのみであった。展示では幕末の江戸城の様子を示すため、太政官の役人であったにながわのりたね蜷川式胤らが中心となって撮影された写真(展示番号3)などから10枚ほどを選び、明治初年に荒廃しつつあった江戸城の様子を紹介した。

慶応4年正月に戊辰戦争が始まると、江戸では2月に上野寛永寺に徳川慶喜が謹慎し、3月に三田薩摩藩邸における政府軍参謀の西郷隆盛と勝海舟の会談を経て、4月11日に江戸城が開城された。同21日には東征大総督である有栖川宮熾仁親王が江戸城へ入城し、実質的に政府へ引き渡されていった。史料では有栖川宮が江戸城へ入城する際の町触を紹介し、その具体的な様子を示した(展示番号4)。

江戸城が新政府へ引き渡されたことに象徴されるように、新政府の方針のもと江戸もさまざまに変化していく。慶応4年7月に江戸は東京と改称され、江戸城は行宮の呼称を経て、10月13日の明治天皇の行幸にあわせて東京城と改められた。明治天皇の東幸にあたっては、東京府民へ酒3,000樽余を下賜し、町の大きさにあわせて分配された。これにあわせて家業の差し止めが命じられていたため、大いに賑わったという(展示番号5、8)。また明治天皇の大嘗祭(天皇の即位礼後、はじめて開催される新嘗祭)は、維新後の混乱もあり明治4年11月になって東京にて実施された。当日は各地の神社でも相応の神事を開催するよう命じられたほか、東京では山車なども出され祝典が催された(展示番号6、7)。

明治天皇の東幸に際しては、江戸・東京内でも多くの反発があったことが想定される。しかし一面では、紹介したような祭事・儀式に東京の人びとも多く参加しており、徐々にではあるが明治天皇、新政府という存在が浸透していった様子を見とることができるだろう。



御酒頂戴(展示番号8)

## II 明治政府と皇城

第1章では江戸から東京への移行について、新政府軍の進軍や明治天皇の東幸などを紹介した。本章では江戸城から東京城・皇城への変遷や東京の変化について紹介していきたい。

明治天皇の東幸に際して改称された東京城は、明治2年3月の再幸にともなって皇城と改められた。これに前後して皇城内に政府組織の整備がすすめられる。明治元年閏4月の政体書によって「天下ノ権力総テコレヲ太政官ニ帰ス」とされ、太政官が政府の意思決定機関と定められ、明治2年の再幸を前に太政官は二条城から皇城へ移された。その後、皇城内には宮内省などが設置され、各省が太政官へ上申する際の控室や府藩県官員の控室も設けられている。これまで格式や役職などによって割り振られていた江戸城西丸の各部屋は、明治政府の役職や省庁・府藩県の控室に当てられていたのである。展示では、明治2年8月の様子を示すと考えられる「皇城絵図面」（展示番号13）と幕末期の江戸城西丸の様子を表した「江戸城西丸仮御殿御表向御中奥大奥向総地絵図」（展示番号12）を並べて展示し、江戸城内の黒書院が太政官に、御三家の詰間が外務省の控室などその変遷を理解しやすいように示した。

明治2年の再幸前に、皇城には宮中三殿が増設され、同年10月には皇后（昭憲皇太后）も東京へ行啓され皇城に入るなど、明治天皇の居所として整備が進められる。その様子は、「皇居御造営誌下調図」から明治元年10月、同2年3月の皇城（東京城）の図面を示し増築の様子を紹介した（展示番号14）。



展示風景（第2章）

これらの行幸行啓にあわせて、多くの公家も東京へ移住した。展示ではまず公家が見た江戸の様子を示すために、明治天皇の外祖父である中山忠能<sup>なかやまただやす</sup>が明治元年10月に江戸から京都に宛てた手紙を紹介した（展示番号21）。幕末の江戸城は本丸機能も併せて作られた手

狭な西丸が政庁であったが、中山にすれば広く大そう成るものとして映った点は、武家側との認識の違いが判明し興味深い。また公家の住居について、明治政府は東京府を經由して旗本の屋敷などを上地しており、それを貸し与えていたようである。明治5年には、公家華族が東京府の貫属になるにあたって東京か京都の屋敷地のどちらかを選ばせるなどの対応をしている（展示番号18～20）。

これら皇城や町々の変化からは、江戸時代と異なる都市空間が東京に醸成されていったことを指摘できるだろう。

## III 移り変わる東京の政治空間

明治2年以降、徐々に整備されていった東京の都市空間であったが、明治6年5月に起きた火災で皇城とその一帯が焼失したことにより一変する。天皇の居所は、赤坂にあった紀州

徳川家の屋敷を利用して赤坂仮皇居として整備された。本章では、この仮皇居の様子について紹介している。

皇城内にあった宮内省は仮皇居内に設置され、明治10年には一時離れていた太政官も仮皇居内に移転される。武家屋敷を転じて増改築された仮皇居は和洋入り交じり、移行期の様子をよく示している（展示番号22）。仮皇居内を描いた錦絵からは、畳上に絨毯を敷き椅子に腰かける洋装の明治天皇と和装の皇后（昭憲皇太后）や女官が描かれ、服装など文化の違いも象徴的である（展示番号23）。また、明治14年には敷地内には御会食所（現在の明治記念館）が建設され、外賓の接待や大日本帝国憲法審議に利用されたことはよく知られている（展示番号26）。

#### IV. 近代国家の象徴「明治宮殿」

赤坂仮皇居の拡充と並行して、明治6年5月の皇城炎上直後から、皇居再建に向けた動きは始まっていた。本章では、明治22年2月に明治宮殿（宮城）で開催された憲法発布式を終着点とし、そこに至るまでの明治宮殿建設の過程を紹介している。

本章の中心となる史料は、明治宮殿の造営にあたって中心的な役割を果たした木子清敬<sup>きこきよよし</sup>の関係史料である。木子家は代々内裏の作事に関わる大工の家であり、清敬は宮内省に出仕後青山御所、皇居、御用邸など皇室関係の建築設計にたずさわった。そのため明治宮殿の完成図はもとより建築物の草案などその過程を知ることが出来る史料が多い。

例えば江戸城でも採用されていた書院造に似た構造が明治宮殿内でも取り入れられており、天皇家や皇族の格式や役職によって床の高さが異なるよう格式を視覚的に把握できる工夫が施されていた（展示番号38、42）。また



展示風景（第4章 起し絵図）

明治宮殿を立体的に把握できる起し絵図は宮殿が焼失してしまった現在において、当時の様子を知ることが出来る貴重な史料であるといえる（展示番号39、40）。

当展示の最後は明治22年2月に明治宮殿で開催された憲法発布式である。発布式の様子を示す錦絵（展示番号46）では、洋風の宮殿のなかで洋装をした明治天皇以下が描かれており、洋和装の交った仮皇居の様子（展示番号23）とは対照的である。このように段階的な変化を経て、明治宮殿をはじめとした建築様式、江戸・東京の町々、人々の服装に至るまで近代への歩みがすすめられていったのである。

### 3 成果と課題

当展示は15日間の開催期間のなかで、のべ6,010名の方にご観覧いただいた。アンケー

トにご回答をいただいた方の年代をみると、〈10代：2%、20代：4%、30代：9%、40代：18%、50代：22%、60代：24%、70代：15%、80代以上：5%、無回答：1%〉であった。当展示は、おおよそ40代以上の方を中心にご観覧いただいたことがわかる。開催期間のほとんどが平日であったこともあってか、30代以下の方は少ない。文化財を身近に感じてもらうという趣旨や、文化財保護を次世代へも引き継ぐという点を考えれば、今後30代以下の世代にどのように広報していくのか、という点が喫緊の課題といえるだろう。

次に展示内容についてアンケートの集計結果を分析していくと、「今回の企画展はいかがでしたか？」については、〈大変よかった：32%、良かった：63%、あまり良くなかった：3%、良くなかった：0%、無回答：2%〉との結果が示され、展示の総体として概ね好評をいただいたといえる。また展示の内容について「どの展示物に興味をお持ちになりましたか（複数回答可）」には〈①江戸から東京へ：30%、②明治政府と「皇城」：23%、③移り変わる東京の政治空間：9%、④近代国家の象徴「明治宮殿」：19%、⑤第2会場：14%。その他：2%、無回答：3%〉との結果が示された。会場には写真や錦絵、絵図面など多くの図面類を展示したが、第1章部分には明治4年に撮影された江戸城の写真を紹介しており、より具体的に明治初年の様子を知ることができたことが、好評につながったものと考えられる。

また、東京都公文書館の認知度については〈以前から知っていた：43%、以前に利用したことがある：9%、今回の展示で初めて知った：48%〉となり、おおよそ50%の認知度であった。今年度は、5月の大型連休中に開催した「延慶館の時代」展などもあり、多くのメディアに取り上げていただき、都民の方々にも公文書館の名前は大分周知されていることがうかがえる。今後は、名前のみならず仕事や機能にいたる点まで理解していただくことが必要となるだろう。こうした活動が利用の促進にもつながっていくと考える。

展示内容について具体的にいただいた回答をみると、「中々江戸城が新政府にどのように使われていくかの経緯がわからなかったが一目にして分った」や「江戸城から明治宮殿への流れが良く理解できた」など、江戸から東京、江戸城から明治宮殿にいたる過程といった、当展示のねらいを理解いただけたようである。また「ギャラリートークで要点を解説して頂き嬉しかったです」や「ギャラリートークが面白かったです」など、週に2～3回ほど開催したギャラリートークがこうした理解につながったものと考えられる。

一方で、「展示物が少ない」というご指摘をいただいた。展示スペースは限られており、そこでいかに満足いただける展示を実施するか、今後とも取り組んでいきたい。また「全体的に説明不足」やパネル解説を「分かりやすくしてほしい」というご意見もいただいた。今回は特に建築関係の史料も多く、専門用語なども多かったように思われる。パネル解説を充実させることはもちろんであるが、用語解説シートなど展示を補足する資料を用意する工夫が必要だったと思われる。この点については次回以降の展示に活かしていきたい。また、展示担当者の力量不足から事実関係にかかわるご指摘もいくつかいただいた。以後は誤解のないより丁寧な叙述が求められよう。この点も次回以降の課題としていきたい。

最後に、展示の成果を総括したい。当展示では、①明治維新後の江戸城の使われ方、②江戸城→東京城→皇城→仮皇居→明治宮殿（宮城）そして現在の皇居につながる変遷、③明治初年において明治天皇をはじめ皇室、宮殿などの和洋をめぐる見せ方、この3点については、アンケート結果から大よそ理解していただけたように思う。これらは見落とされがちではあるが、現代につながる近代日本の様相を描くうえでは不可欠な要素である。今後とも江戸・

東京の様相をよりリアルに理解していただけるような叙述を心掛けると共に、みなさまの関心のあるテーマに沿った展示を企画していきたい。

文末にはなりますが、当展示開催にあたりご協力を賜りました関係諸機関のみなさまにお礼を申し上げます。

文化財ウィーク展「江戸城から明治宮殿へ」展示資料一覧

章	展示番号	請求記号	資料名	形態	所蔵館
第1章	1	東6175-8	正徳四甲午六月改紅葉山惣指図	原本	東京都立中央図書館
	2	東6153-1	江戸城御吹上総絵図	原本	東京都立中央図書館
	3	東617-10	江戸城写真集	原本	東京都立中央図書館
	4	605.A4.08	勅使御下向一件・4	原本	東京都公文書館
	5	634.D4.10	東京城日誌・自第1号至第8号・1(明治元年戊辰10月-12月) 明治元年	原本	東京都公文書館
		634.D4.06	鎮将府日誌・自第1号至第7号・1(・慶応4年戊辰8月) 慶応4年	原本	東京都公文書館
	6	605.C3.12	御用留(府兵局)	原本	東京都公文書館
	7	東183-C1	大嘗祭豊明節会奉賀祝 日本橋南通り町筋賑ひ之図	原本	東京都立中央図書館
8	あ1	御酒頂戴	パネル	東京都公文書館	
第2章	9	605.B3.03	太政官御用留(明治3年)	原本	東京都公文書館
	10	605.C7.01	工部省御用留	原本	東京都公文書館
	11	605.B3.07	民部省大蔵省御用留	原本	東京都公文書館
	12	東6171-21	江戸城西丸仮御殿御表向御中奥大奥向総地絵図	原本	東京都公文書館
	13	175・544	皇城絵図面	パネル	宮内庁図書寮文庫
	14	80100	皇居御造営誌下調図 1/明治25年	パネル	宮内庁宮内公文書館
	15	605.A6.08	布令・完	原本	東京都公文書館
	16	605.A6.06	太政官御布告留・乾	原本	東京都公文書館
		605.A6.07	太政官御布告留・坤	原本	東京都公文書館
	17	1	幸啓録明治2 明治3年	パネル	宮内庁宮内公文書館
	18	請求番号なし	旗本上ヶ屋敷図	原本	東京都公文書館
	19	632.B2.24	法令類纂 卷之四十八	原本	東京都公文書館
	20	605.C4.19	拝領地願願込・旧邸宅掛取扱(第三課)	原本	東京都公文書館
21	73745	中山忠能履歴資料41	パネル	宮内庁宮内公文書館	
第3章	22	木52-2-1	赤坂仮皇居配置平面図	原本	東京都立中央図書館
	23	東199-C7	仮皇居御庭拝見之図	原本	東京都立中央図書館
	24	木44-3-18	[赤坂離宮]庭園図	原本	東京都立中央図書館
	25	和-別132	赤坂假皇居及太政官真景	原本	東京都立中央図書館
	26	木72-2-84	赤坂假皇居会食所・御車寄平面図	原本	東京都立中央図書館
第4章	27	木119-3-1	皇居(明治宮殿)造営「建白書」	原本	東京都立中央図書館
	28	木167-28	木子清敬宮内省辞令(明治14.4.19)(皇居御造営掛)	原本	東京都立中央図書館
	29	634.C7.16	工部省記録・営繕・皇居御造営部(天)・自明治7年至同14年・107	原本	東京都公文書館
	30	木89-3-8	皇居(明治宮殿)吹上地質実験図	原本	東京都立中央図書館
	31	木111-3-163	皇居(明治宮殿)山里正殿平面図(一階)	原本	東京都立中央図書館
	32	木81-1-6	皇居(明治宮殿)表宮殿鳥瞰図	原本	東京都立中央図書館
	33	木92-1-1	皇居(明治宮殿)造営地鎮祭式場見取図	原本	東京都立中央図書館
	34	東193-C3	大日本帝国造営御所之図	原本	東京都立中央図書館
	35	東195-C1	新宮城え御移転ノ図	原本	東京都立中央図書館
	36	木89-1-14	皇居(明治宮殿)賢所・奥宮殿・表宮殿配置平面図	原本	東京都立中央図書館
	37	木109-1-21	[皇居(明治宮殿)表宮殿・奥宮殿建物]床・地盤高さ比較図	原本	東京都立中央図書館
	38	木111-3-7	皇居(明治宮殿)表宮殿床高さ比較図	原本	東京都立中央図書館
	39	木106-1-2	皇居(明治宮殿)表宮殿起し絵図(饗宴所・後席之間)	原本	東京都立中央図書館
	40	木106-1-1	皇居(明治宮殿)表宮殿起し絵図(御学問所・内謁見所)	原本	東京都立中央図書館
	41	木81-2-5	[皇居(明治宮殿)御学問所・聖上常御殿]立面図(南面)	原本	東京都立中央図書館
	42	木109-1-57	皇居(明治宮殿)奥宮殿建物床高さ色分図	原本	東京都立中央図書館
	43	木108-1-37	皇居(明治宮殿)奥宮殿建物床色分図	原本	東京都立中央図書館
	44	加2063	皇城干草御間格天井綴錦草花圖	原本	東京都立中央図書館
	45	木W9	皇居奥表繪画録	原本	東京都立中央図書館
	46	東606-C9	憲法発布式之図	原本	東京都立中央図書館
47-48	568	憲法発布式録1明治22年	パネル	宮内庁宮内公文書館	
	12848	憲法発布式録明治22年	パネル	宮内庁宮内公文書館	

## 「江戸城から明治宮殿へ」年表

名称	和暦	西暦	月	日	出来事
江戸城	安政6年	1859	10	17	江戸城本丸が火事にて焼失する
	万延元年	1860	11		江戸城本丸の普請が成り、上棟される
	文久3年	1863	6	3	江戸城西丸が火事にて焼失する
			11	15	江戸城本丸および二の丸が火事にて焼失する
	元治元年	1864	1		西丸仮御殿の再建が着工する。6月26日、大奥向を上棟し、7月23日表向が上棟される。以降、本丸御殿は再建されず
			7	3	幕府、天璋院(てんしょういん、13代将軍徳川家定の正室)の居所に充てるため二の丸の造営を命じる
	慶応3年	1867	12	23	江戸城二の丸が焼ける。本寿院(ほんじゅういん、13代将軍家定の生母)、実成院(じつじょういん、14代将軍家茂生母)ら西丸へ移る
	明治元年	1868	1	12	大坂より徳川慶喜、松平容保らが江戸城へ帰着する 2月、慶喜が上野寛永寺大慈院に謹慎する
			3	13	翌14日にかけて、新政府軍参謀西郷隆盛と勝海舟との間で江戸総攻撃の中止、江戸城開城、慶喜の助命が交渉され決定する
			4	11	江戸城が新政府軍に引き渡され、徳川慶喜は上野寛永寺から水戸へむかう 21日大総督有栖川宮熾仁親王が江戸城へ入城する
7			17	江戸を改め東京とする旨の詔書が出され、東京府となる	
東京城	明治元年	1868	10	13	明治天皇が行幸し江戸城に入る(12月8日帰京)。旧江戸城を皇居とし、名称を東京城と改称する
			12	19	新政府、徳川家達に命じ紅葉山の徳川家霊廟を撤去させる
皇城	明治2年	1869	3	27	明治天皇、再び東京へ行幸し東京城へ入る。28日、東京城を皇城と改称する
			10	24	皇后(昭憲皇太后)が皇城へ行啓する
	明治3年	1870	閏10	19	民部大蔵両省が皇城内へ移転する
			閏10	20	工部省が設置され、皇城内民部省中に仮庁舎が置かれる
	明治4年	1871	11	17	大嘗祭が皇城吹上御庭において挙行される 18日19日宮中にて豊明節会がおこなわれる
明治6年	1873	5	5	皇城が火事にて焼失する。このため赤坂離宮を仮皇居と定め、元教部省に太政官代、集議院に左院代、赤坂離宮に宮内省が移転する	
赤坂仮皇居	明治9年	1876	5	8	太政官、工部省に達して明治10年より5年間で皇居を造営するよう命じる 10年1月に地租減額のため皇居造営の延期が布達される
	明治10年	1877	8		太政官が赤坂仮皇居内に移転する。翌11年6月、洋式木造2階建の太政官庁舎が仮皇居内に新築される
	明治12年	1879	9	12	皇居造営が命じられる
	明治13年	1880	1	26	皇居建築様式について、山里は和様建築、旧西丸跡は洋風建築にすることが決定する
	明治15年	1882	3	3	工部卿宮内卿連署にて、山里に表謁見所を建て、吹上に奥向造営をなすの議を上申する
			5	27	皇居造営事務局が設置され、総裁に三條実美、副総裁に海軍中将榎本武揚が任じられる
	明治17年	1884	4	17	皇居造営地の地鎮祭を執り行なう
	明治19年	1886	12	31	宮殿室内装飾および家具取り調べのため出仕官片山東熊以下をドイツに派遣する
	明治21年	1888	3	18	皇居装飾織物など取り調べのため農商務四等技師荒川新一郎を京都に派遣する
			10	10	皇居造営が成り、皇居御造営残業掛、宮殿のほか諸建物を内匠寮へ引き渡す
宮城	明治21年	1888	10	27	宮内省、告示して皇城を宮城と改称する
	明治22年	1889	1	11	明治天皇、皇后(昭憲皇太后)が宮城へ移徙する
2			11	紀元節、宮中にて憲法発布式がおこなわれる	
皇居	昭和20年	1945	5	25	アメリカ軍の空襲により、明治宮殿が全焼する
	昭和23年	1948	7	1	「宮城」の名を廃して、皇居を正式名称とする
	昭和39年	1964	7		明治宮殿の跡に新宮殿を造立することが決まり、43年10月に完成する

※本報告書の著作権は東京都にあります。「私的使用のための複製」や「引用」など著作権法上認められた場合を除き、無断で複製・転用することはできません。